

護法の唯識説の一断面

勝 又 俊 教

護法の唯識説が如何なるものであるか、またそれが唯識思想史上如何なる位置を占め、如何なる特色を發揮したものであるかについては今更問題にする必要もないであろう。併し従來護法の唯識説と言えば成唯識論のみによつて説明する傾向があり、成唯識實生論や大乘廣百論釋論や觀所緣論釋は殆んど顧みられなかつた。これは護法の唯識思想を研究するに當つて充分な方法であるとは言われないであろう。何となれば護法は元來専ら諸論書に註釋を書いた註釋家であり、嚴密に言えば護法自らの思想體系を知ることとはできない。例えば成唯識論をとつてみても、これは唯識三十頌の註釋書であるから、唯識三十頌の思想體系を逸脱することはない。しかも瑜伽論144、攝論37、集論雜集論30、莊嚴論15、楞伽經14、解深密經11、辯中邊論7、顯揚論6、厚嚴經6、佛地經6、阿毘達磨經5、勝鬘經4、集量論1、分別瑜伽論1、觀所緣論1、尙その他多くの經論を引用して、それらの思想的影響が大きい。併し護法はそれらの思想を縦横に驅馳して多くの假説を立て、それらを破して自己の根本主張を明確にしているのであるから、そこに護法の唯識説の特徴が認められるのみならず、またそれらを通じて護法の唯識説の全體的立場も明確になしうるのである。併しそれにも拘らず唯識三十頌の註釋書たる制約を受けているので護法の唯識説が成唯識論によつて必

ずしも充分に述べられていると見ることはできない。

このように考へてみると護法の唯識説の一面を成唯識論以外の他の註釋書によつて補つて考察することが必要となつてくる。そこで先ず大乘廣百論釋論をとりあげてみたい。この釋論は提婆の廣百論を解釋したものであり、瑜伽行派の學者たる護法の教學にも中觀派の學説を正しく理解しようとする學風の存することを知るのであり、この點は安慧に於ても同様であるが、特に護法の場合には中觀派の思想の傳統的な理解の外に、自らの瑜伽行派の學者としての唯識的な説明を處々に示していることは興味深いものがある。そこで廣百論釋論に於ける唯識説を検討し、成唯識論との關係を明らかにし、そこに護法の唯識説の一断面を探究したいと思う。

廣百論釋論は破常品、破我品、破時品、破見品、破根境品、破邊執品、破有爲相品、教誡弟子品の八品から成り、これらの品の題目が示す如く、外道小乘の實我實法の迷執を破することが主題とされていて、成唯識論の外小破に相當する部分であり、恐らく成唯識論の外小破は廣百論釋論を簡潔に組織したものであろうことは兩論が處々に一致する文を見出すことから推定される。而してこの兩論書の關係を明確にし、兩論書の成立問題を探究することが基礎的研究となるが、併しこの問題はかなり複雑であり、それを詳論するこ

とはこの小論致では不可能であるから、こゝではたゞ結論を述べることにしたい。

・先ず廣百論釋論に散説されている唯識説の共通な特徴は廣百論の偈の註釋に直接關係ある思想についての唯識的解明と云う點に限定されていて、廣く唯識系諸論書に現れた唯識説上の諸問題に觸れていないことである。それはあたかも成唯識論が唯識三十頌の性格を基調としていると同様に、この釋論は廣百論の性格を帯びているのであつて、言換えれば中觀思想の諸問題についての唯識的解明がその主要な課題となつてゐる。

次に個々の問題については、問題の所在を明らかにするために項目を分けて考察しよう。

第一は虚妄分別 (abhidharmaparikalpa) の唯識的理解である。即ち廣百論の教誡弟子品第八、二十三偈に

若法本性空、見_レ空有_二何德_一、虚妄分別縛、證_レ空見能除。

とあるのを解釋するにあつて、虚妄分別は三界の心所であり、依他起性の識であるとし、諸法は空無我であるけれども、人々は諸法を分別して有である或は無であるとなし、染淨が生ずるから虚妄分別のみと云うのであり、この虚妄分別を識の概念で置きかえるから、また唯識無境と説くのであり、しかも空性の立場に於ては虚妄分別は斷除さるべきものとなすのである。ところでこのような思想は中邊分別論相品に於て虚妄分別と空性ととの關係を論じ、虚妄分別有の立場に於て唯識説を展開せしめるのと同じ考方である。従つて護法は廣百論にもつき、また恐らく中邊分別論の影響も受けてつ、唯識説を空性説との關係に於て考えていたのであり、成唯識論に見る如き道理世俗諦に於ける唯識有の説は決して護法の唯識説の

護法の唯識説の一斷面 (勝 又)

全體系ではないことを注意しなければならぬ。

第二は唯識無境の論難の仕方についてである。その論難は實有論者から投げかけられたもので、若し法が實有であるならば實有の法に對して虚妄に分別すれば迷執が生ずるが、法が無であるならば、有無の分別も起らないであらう。また唯識無境は夢中の意識の如きものであると説くならば、この喩も正しくない。何となれば夢中で分別する場合でもそこに分別があるから境を現ずることになるが、諸法皆空であれば分別もないことになる。それにもかかわらず分別があると考えるならば龜毛兔角の如く實用のないものであらう。また色心諸法が空であるならば迷悟もあり得ない。従つて實有の色心を正しく見るか誤り見るかによつて迷悟があると考えべきだと主張している。この論難は唯識二十論及び成唯識論の唯識九難義中の第六現量爲宗難と第七夢覺相違難とに類似し、唯識説への論難としては一部分しか示されていないが、ただここで特に注意すべきは、この論難は唯識無境説への論難であるばかりでなく、また皆空説への論難ともなつてゐることである。これは護法に於て唯識説と空説とは矛盾するものでないことを前提としてゐるからである。

第三に唯識説を成立するために三性説を説き、特に依他起性の有を主張する。先ず有餘師の説をあげて、分別所執の法は無であり、因緣所生の法は有であるとし、また遍計所執無、依他起性有、妄分別失壞、墮_二増減_一の偈を引いて、護法自身の結論としては遍計所執性はたゞ世間の妄情によつて立てたものであるから無であり、依他起性は因緣生のものであるから有であると信すべしとまで言つてゐる。これに對して空論者から契經に一切皆空とか諸法無自性と説くのと矛盾すると論難を投げかける。そこで護法は一切空と云う

のは遍計所執性を破するのみで、一切が無なることを説くのではない。若し一切が無であるならば邪見であり、惡取空であると説き、また空教は特別な意味があるのであつて一切法を揆無するのではない、言の如くその意味を解釋するのは大乘を誹謗することになるとも説いている。そして更に護法と惡取空者とが依他起性の有無について論争を繰返しているが、護法の根本主張は染淨諸法たる依他起性をも無とすれば迷も悟もないことになり、それは惡取空であるとなす點にある。この點は成唯識論に於ける唯識九難義中の第四唯識成空の難及び九難義の結文に惡取空を論破するところと趣意が一致している。惡取空を破することは既に瑜伽論第三十六に詳説されており、護法はその思想の影響を受けていることが推定されるが、兎も角惡取空を破して依他の有を主張して唯識説を成立せしめている點は空思想から唯識思想の領域を獨立せしめるのであつて、成唯識論に比して遙かに本書の方が詳述されている。

第四は唯識説の教證についてである。即ちこの釋論では唯識説の教證として三經をあげるが、その中三界唯心だけは華嚴經の説であり、既に攝大乘論等でも取上げられた教證であつたが、その他に、無_レ毛端量實物可_レ依、愚夫異生造_レ諸業行、唯有_レ顛倒與_レ彼爲_レ依、と、無_レ有_レ少法自性可_レ得、唯有_レ能造_レの二文を掲げ、唯有_レ顛倒_一と唯有_レ能造_二を虛妄分別、或は心心所と解釋している。この二經は何經を指すか明らかになし得ないが恐らく般若部系統の經典の引文と考えられる。然るに成唯識論では華嚴經の三界唯心と解深密經の識所緣唯識所現と入楞伽經の諸法不離心と維摩經の有情隨_レ心垢淨と阿毘達磨經の四智説と厚嚴經の一偈とを以て教證としている。從つて兩者の一致するのは華嚴經のみである。これは護法が廣百論釋

論に於ては廣百論の思想の源流としての般若思想の唯識的解明に重點をおいたからであらうと考えられるが、兎も角唯識説の教證に成唯識論で説くような唯識系經典による傳統的な教證の外に、般若思想をも引證していることは、護法の唯識説の源流觀には從來顧みられなかつた一面を見出しうるのである。

第五には唯識説は外境の執を破するのが目的であつて、唯識有を固執すれば顛倒となることを強調している。即ち唯識無境と言つても能緣の心のみがあつて所緣の境のない識はあり得ない。世俗的に見れば識も境も共にあると言ふべきである。そこで唯識無境と言ふのはそのまま、固定的に考えられないとし、契經の偈を引いて、唯識有と説くのは識を觀して外塵の執着を捨てしめんがためであるが、既に外塵の執着を捨てれば、妄心も隨つて息むこととなり、かくして境無識無の平等真空を證するところが中道であり、涅槃であると言ふ。このような考方は唯識説は單に唯識有を固執するのでなく、境無を媒介として妄識を滅するところに唯識説の實踐的意義があることを強調するのであり、この點は先に述べた第一項に空を證すれば虛妄分別の縛を除くと説くのと同一の思想である。而して護法がまた成唯識論卷二に、爲_レ遣_レ妄執_二心心所外實有_一境説_レ唯有_レ識、若執_二唯識眞實有_一、如_レ執_二外境_一亦是法執と説くのとまさしく共通な思想である。しかもこのような思想は既に中邊分別論や莊嚴經論や分別瑜伽論や攝大乘論等にも説かれていたから、護法もそれらの傳統的な學説に従つたのであり、護法の唯識説が決して識有の立場にのみ留つていたのでないことが明瞭となる。

第六には同じく識體の有を破する場合でもその説き方を異にするものがある。即ち破根塵品第五に、諸法は識を離れて存在しないか

ら諸法は不離心と信ずべしと説いているが、しかしまた唯識有と執すれば誤りであるとし、識體も見相二分も因縁生の故に幻の如く有であるが、その性は空、無性であると説き、こゝでも唯識と説きつつ唯識有に留らない立場を明瞭にしている。

第七には境無の故に識無と云う思想を唯識的に解明する場合、二つの解釋をなしている。即ち破邊執品第六(二十五偈)に説く

識爲諸有種、境是識所行、見境無我時、諸有種皆滅。

の偈は六識説に於ても境と識との關係から、三界の輪廻と空寂涅槃とを説明しうるのであり、またこの偈は佛性論卷第四にも提婆法師の偈として引かれて、境無の故に識無の唯識智の立場を示すものであり、それが中道であるとされているが、護法はこのような六識説による唯識説を明らかにすると共に、更にまたこれを八識説で解釋し、特に阿頼耶識の異名として宅識の語を用い、宅識の中に無明と愛とに隨増された諸業の種子が薰成され、その種子が縁に合うて境を執するところに迷の世界があり、唯識無境をさすれば有漏の種子はなくなり、無漏智が現れて佛果に至るのであるとし、行位に約する唯識觀を豫想しており、まさしく唯識説の實踐的意義を強調するのであつて、唯識と空と中道とが同じ思想的基盤の上に立つていることを明示している。

その他尙、三分説や二諦説等についても注意すべきものがあるがそれらにはふれない。

以上廣百論釋論に散説されている護法の唯識説の特色を探索してみたのであるが、それらの唯識説は提婆の偈に現れた思想を唯識的に解明すること限定されていること、従つてその唯識説は眞諦空の思想を唯識的に明確にするのであつて、空觀と唯識觀とは本來異

るものではなく、共に虛妄分別の縛を除く覺證の實踐であること、しかしまた唯識説は空性より識有、或は虛妄分別有、或は心心所の有、或は依他起性の有を獨立せしめるところに唯識説の獨自の領域があるが、それは空性への悟入の方便的意義を有することが強調されている。かくして護法は大乗廣百論釋論に於て唯識説の實踐的意義に至るところに明快に説示している。これらの點は中邊分別論に於て虛妄分別と空性との關係を論ずる點と相通する思想であるが、このような思想も護法の唯識説の體系に於ける重要な一斷面であることを認めなければならぬ。

1 大乗廣百論釋論と成唯識論との關係については遠藤二平氏が國譯一切經中の大乗廣百論釋論の解題に詳説されている。これは成唯識論の原型を推定するに重要な手掛りとなる。尙拙稿、成唯識論の成立について(大正大學研究紀要第三十九輯)參照。

2 大乗廣百論釋論卷第十、大正藏三〇、二四六、上。

3 中邊分別論、大正藏三一・四五二、以下、四六四以下、Madhyantavibhāgāṭikā par. Susumu Yamaguchi, p. 10。

4 大乗廣百論釋論卷第十、大正藏三〇、二四六、中。

5 大乗廣百論釋論卷第十、大正藏三〇、二四七、中。

6 瑜伽師地論卷第三十六、大正藏三〇、四八八、下。

7 大乗廣百論釋論卷第十、大正藏三〇、二四九、上。

8 7に同じ。

9 大乗廣百論釋論卷第八、大正藏三〇、二二九、上。

10 同 二三六上。

11 佛性論卷第四、大正藏三一、八〇九、下。

(昭和二十八年度文部省科學研究費による研究の一部)